國意考

全

リ 4
93

利4
93

國意考

加茂真淵述

正宗文庫藏

あれ人の、我いふやうのちひさきふることどもを、
しゐてそのゆゑをおもひもとむるがうへの道理
をそこらへ、おほうれさうぐ矣てこゝろぐるほふ
人ふあひめるまさまをとりあつめ、ふぐ矣に
わらひておもへるしハあらうやなどいふるがふのれいに
そこのうへハかむの傷をもむのうへにそハ天
地のこゝろ我さびていこもしさへ人の他をうらぼふ
てあまてつふぐこゝろをいこでけ大道を

ちひさうしらくまやにて、おのれいそぐ、其中乃
ゆうはるやいなやつゆぬぐ、しらくで、夷舞多般
周などをもて、器、れのれ、其後ふるなるやごを
とまる、同元、うるむの物まる代、ぐ、ぐ、ぐ、
夷より今まで、歳ちろく、まる間、ばなど千年ろう
周までのまねなる、まほふあるぐ、もむやなど、而、ぐ、の
はのぐ、もろしのこ、ぬ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
そふたぐ、もろしれ、ゆふるまれぐよ、ぐ、せ、れ
中のこふ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
えけるをこ、ぐ、け人、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、

まつ、ぐ、ぐ、解、れのれ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、の夷い舞の
いやしげなふ後まつ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
て、人あ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
やしげなる者の出て、笑ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
やうふなる、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
をぐれ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
ういけむ人、夷舞の民、家をなぐて、封ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、
ぐのまさをぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、

どいふこと封どうさ人なりしむ。舜の後を禹とうけ又い
ろろ人にて、をときさ忠よなりしけるとうこと舜の民
ふて、禹の父なるふ。まさ封ることさ人なりしどやぶしば。
孟子に、今の世ふつて、勸化のいさらのこなりきて。
まさ、殷の世いろしたぐきふや、其始いまれ人にて。
禹の世を傳ひるとうこ、さしぶ、をつどうしたど
やうさ人ふけるくぐうきん、まさたびなき紂しや
らんうこ、ぐろ人のいけるこうどもまれふ傳しいい。
惟上つ代一代二代まや、をもとやらあこどなりいと。
さて周の文王しやむいひとうる紂だと法ひたり。

ようせどハ、分のうこどもひとめぐられ紂王のうろこ
ふしうて中しふ人をなつけふどせしいうこうや。
武王の時紂をうちしをでこうるいくさとやらん
いつど、伯夷叔齊ゐいころふをれるとふひと
こうきく人このうちふ。さうで武王をふふいと
んまこふ義なりしば紂の後をえでこをとそれが来を。
韓などくはふらしやうてなどこうれるまど
ふやばうをむ。
○さて周公設をうて殷の法度を四十條ばかり
けむこ、孟子こ文王三四十まうの度ごるころ。

人はあらむが周公はあさなゆふなくふかくおもひてほろぼ
せしことなかるべしかくまでするが翁どもの世やそれ
さへありては八百年をたもてど初二代までは十年ばかり
あるは治まりといへどもやがて乱てなかりしおと
ろへになりぬ其四十年ばかりの前周までは上下とも人は家
にとゞこほりせずして外へまはりつゝもがら世の中の
みだれは世の中のみだれもあらずもしくはいでさせ外へ出しても
ようしまさるは内のみだれまで乱の基しとの
なりさましかば四十年の間も治まることへ侍らざり
きとぞ

○それよりのちは漢の世に文帝といひし明暗
治まりはきゝもうしとさへいやしきなるひともあて
天をうらしらずしる帝といでせし世の人とかふうりへ
あらまれて帳(コシタ)ひつくぐれのことなりしを四方の事を
いえびとをるといひてはいやしめつゝも其まゝにまより
立て唐國のことのぶとなれることいきとゞこふぬくの額
ばらて(突)あるこつり。さりしば夷をていやしめなるを
いひつゞとなりとやいとも世挙ていへる法まれあ
らざるべしぬ是せくふみだれて治まるまじきなりに
儒者の道ありとて天が下の理を解(トキ)ぬばかりに世の

なるふべつべきこともなくごうぶえをどくちち
ひとくにのなるものなれば人のしゝ字はるふぞ侍る。
日の本の
光ものゝ者しるはせの治ゝ人の代く侍ふるを
てて夫めさる所ゝ有て生てある天ゞ下の日じ
きふ仏て夫なるんなれいうふべ学しやてんに
きうぬこと者べし。侍るを山ゐよまう侍てを。
唐ゐまてハ此野ふて治ゝやうふ解ハるゝ
どのゝ也。拉なゞゞは人をやゝて唐国をゝ也で
や浦賀のゝゞ古郷へうゝしどなるべし。
○ゝのゐハ天地のゝれまゝ治りたまひてさる

ちひさゝ野ゝめゝたるまゝのなゝさまゝ係うゞげ
ふとゝるゝゝゞものの後ゝ侍をべ。ゝゝなりとおりゝ
むゝし人のなゐかさゝ侍へひろめて侍ふゝし
ゝゝゝおゝゝの御代ゝ。やゝゝゝゝゝ
を。此侍のゝゝゝうゝ侍るほどふゐて。天武の御時。
大なる乳出来て。ゝゝなゝのゝ皮のうゝも。衣
冠何度なゞ。唐めゝて。ゝゝゝゝのゝ。みやびふ
なゝ侍。ゝゝしまのゝんゞゝ多くなりぬ。凡侍い
人のんのゝゞしくゝありゞ。ゐをゞあゞむるやう
ふゝ。ゝゝふゝゝして。天ゞ下ハ侍のんふなゝ。

○さてのち、終ふかてけなくかそぐ〳〵ぐ我
為へきらしたるてかぬ。是ぞおのの時て
のわてをなをたる。或人い佛のことを
ろしことど。ひとのんのおろふなりければ。
悪い天ゐ下の人のおろふなりひばさえる
ものふて行く。さしば佛のふをいたなふ
ぐそひ行くぬなり。
○元世の中ぃあし山荒廃の有う。自ら道の
出まぐ〳〵。きもも自ら神代の道のひろぐを
ておのづから。国ゐ行をふ道のさうえい。望

いよ〳〵さうえまうんものをぐくそく儒の道を
そ其国をぐをのぐ。まてをそふうなり行ぬ。
行るをよく。おのんをもまてをふつぐ。
かの道をのぐ変ぐ天ゐ下治るぐとれを人を。
すぐしぐぐなり。
○さて今い人のんをうんものまぐをぬぐ。
世のうめゐ用なをふ似られど。是をよくまるぐ。
治るぐぐまんをおのづから行ぐさなれる
ての人も待と拾をして。巻の上ふ出せ〳〵ぐ。
がゐるんなるべ〳〵。凡物い知ふをとのるてい

いそぐ所なるべし。天地とそなふおとなとあ
おのづからの事にて生てそらくあなれ。彼の
てそなひとそうに紙をおしとふいあしぬとやしも
きれば。そもよりかとよりふいの人のくせなく。紙てを
はるてそよきれ。たゞ考いたしい函をとしのなる
ねぎこをいと。中くにふれぬものてやも
らへでよろづよりわるものなり。
手のいさほいをでふいてり。
○天ゞ下の人とまつてどつるのを紙しとて。
財ふのどみて人のよくくこわるものふあしゝ。

さるこをふうしてけふとおぶきるこいひつるい
おれおのづから出まるをかしたくをくをしの。
よく唐文(カラブミ)より紙をるゞ病をいやをこふいい大めと
かきものふて。はまふるおのづから佛をてはけし。
行のこわるもなを業こをかなしび病いやし
はきををこをふふををしてえたるみ
てをよきれ。おふなづまぬよりぬ。一たび紙よし
とおもてをこふりしせまふしく。儒学生を
中くまるをこちはぬい。学ふまをるものに
ゆをこ○てをきまるをしをはこをきまる。

○或人の云。むしは国よりやうらうかを妻
として。名けものとはじかしと。唐土の通ら
てそろそろもんしに作るごとく。笑傷ふようて
よくなりぬと。おのれ是を聞て大ふ笑へるを。
或人の人云。唐よりはじ性をめらるとて人宝い
ありけるを。おのづから母を新せしに作りし
かしは。只る宝のうしのごとくいうなりの
ろろふれあるをむ。さることをうぬやは性かと
らをいはどろろむとのひしのことを当るとせと
ぞうてきつあうとれりへいのごおろのなふ

ろろうやまさるとをぶ。居していふや。
をづ市ふのいすくいは母の月じを筋を孫の
兄弟とし作り。母しうれがさうもぬなり。
物はころろはけるる宝ろとをれ。さる代ふ
は。年くよさうえたまへを傷のろうて傷る丸
きりて。孫よかくなれることを上る云めしめ
月性めとらどきとを。義のことうなることし
とて。代くふ位を人は棄られこうのい中える。
四方のふしくふ。ろしふるやうのこへめ月。天が
下はおきうなるれうふを作らぬをいきて有

ひきつぬおろかなるこころふ。聞と宗むて身
をんとせよ。いつもたしぬこなり。
○又人と名獸をくなりといふ。人のすてゝ我
ぼめるひて。ものをあるどろものをてゆき唐人の
くせなり。四方の国をえびそといやしりて。
平こ云の名つぬごとし。凡天地の係る生と
し生るものいきおこなるどや。そもこの中に
人のこいうで支くべ人のこいうむをあるや。唐
ふてい。万物の霊とうらひて。人を生るをて
のれこれりよ。人いふ物のあしきものをつ

つふごといふとなれむ。天地日月のおこらぬ
きふ。名獸も奥も草木も。古のごくなるこ
いなし。是なるまで。ひを志ふてこのあるてだの
ご身ひ仕るよう。たこうひのるさまべくのあし
さんの出来て。孫ふ世をもこぶ志ぬ。又治る
ごうちふもこうたこるあざむきをなれこそう。
もし天ごトよ。人二人物しふをいうむ時い。
よきこあるごきを。人皆名あれどいつなるこも
あひうちとなりて。孫ふ用なきなり。今名獸の
国よりハ人こそころれ。まふ似ることなくれ

しどけなくぬぎすてゝ人のそふしを
いとゞ笑ひまとうぶるむ。彩るとぶる字とをゝ。
天地よそむけるものなり。そよ〳〵ざるとおそ
をものゝおほきを。
○又ゑ。ゑまどもばゑる又字なり。唐ゑ字を用
てゑつくれるて彩るべしと。蓋ゑ。ゑつ唐国のと
づらもしくおしさをの治らぬいもんかるさら
なり。こゝをつなるこゝふをいとゞ絵のごとくの文
字ゑけり。今按。そよ人の用ある字のみを挙
といつるとこゝをゞ。こゝ第八千とゝもむ作り。

梅誕生

蕊の一ゝも咲蕊樹葉共に十ゝの字なく
ていたゝゞ。まさゝの玉所の名行の草木の
名をどいひてぶる一の字ありてゞ用ゐる。
かゝ多の字をまを作るもむる人をゝ呼ぶゆゑ。
或い語り。或い代るふ物ゝして共約ふゝまゝも。
蓋なゝわづらもし。彩るを天生ゝ。五十字もて。
五ゑ除巻の佛のゝ佛を書作ゝ。たゞ五十乃
字とだるゝきゞ。古しく今と限るふを同もゝ
き作ゝられ作るをゝ。字のゝゝい五十の聲ハ天
地の字ゝて作ゝ。其内ふもゝゝ作ゝ。其の

おのぼうの所のことまでして作り、こまごまと皇帝国もいこうふる字換うとあり作る人とかのうるの字を作りてよりあやまりてがまるもおほれて。今いむしうの行のこのこれを。これ行ハまこと天竺の五十音ふ同じしうねど。第のこふこと云様五十音の事ふつてなどに又同じ形りてなるふ所をべさくちれ。つぼむ。うほうく。きぐ。らまなどこと。字をもかしでよしもあしもやをくいられて。ちげらひふ。おらんだふ。二十五字こっぱ国ふい五十字こと。大うる字の様も四方の点はし

方言初学軍之花
哥道ノ分
山賊乃風手時自見寝夜不落家在紙半袋而小作提
凡四十の字のうち
筆ゴとに仕んやいで
て知べし今去く
れりひ出ことをとりけ
てこれ例をもちら
用ひなるかし、

こをたぐかしのこと。わづらそしこをとけらうて。代もをきまして。こもを不役なり。さて唐の字い。用そるやうなれど。古へハたぐ字の言をのこかてこの行の目ぶるしけをなり。を惜後ふい字のこころをも交へて用られど。拗訓をのを也ふ用て。言ふいかもそぐしなり。

○かく作ををして字と如としたをべんり
きうせて字をべ作うひしを。後よい作のをべ
れ矣て字の奴の弱うそれるべぐし。是ふ
国の奴ぐこうぶくなれるころくせのう行こ

るなれば。いまいしくことたれのひろうで。字い
るるものとめくおりふい。詩もたしで。武人
相いつの。夫いさいりくふるとだで。唐で風雅なれば。
かるて。おのれ天をあざて笑ふ。風雅こふ世
の中ので。物の理ふたのれで人の乳ること。況
ての上で。理ふ。ふうこと。天地のよろづのお
ふみをなでごで。れのづくんを治めなぐさ
ゆ。むるものでうし。

○且うふも。古しくい縄を結びしこで。ほい
木草を獣おど。実のわさと字こせしなどや。

天竺の五十字も。そふふ物のうちで。付ませ。
字ハやく倍して。風雅なるこあるでさや。甚
後まろさも。四方ふ出なしふどせしを。それまつ
けて。文。竟法ふどいよ。笑ったぬるざなり。いう
で。ほ字のうせだ。おのづくなる字を。天ようえて。ほ
も治り。叶年ひやくぬ。

○さらい。古への字の意行を。おぎつろくまふ。人い
なぐ。字の云しのくふうむや。さいつるぐ。古へ
ん行く。古の字もて。古のん行を。そまと推て。
古への世代有様を知ぐし。古の有様をさりて。

よりおこしたるのはらしにて、弟代のことをも
おりゝのたゞしゝ、さうをとりきる業、弟世の者のこ
ゝと、詩人多きなどゝそを学ばまようまくて、人体
く、弟代のことを国の風ふゝゝゝゝくいひて、且
つゝゝふ人のゝゝゝゝれをて世さまふゝゝな
世ゝいとやゝ作りて人のいふしてさい新玉ゝゝ
さもゝそゝゝふゝゝゝとく紀つらむとれりひて、
そもゝかけふ物ふどもゝゝきものゝゝふゝゝの
こゝハ一つも紀作りざる也、作るゝ古への人の代
をきゝゝゝとのゝゝて、弟代のゝゝゝ紀べゝゝも

のうゝゝこゝいうの唐歌のゝどもゝゝゝゝゝゝれが
下まる業、宋ゝ人代ありていとゝせゝゝ儒の
道をまゝゝく難くゝ作りもていひつのまるをゝら
やゝゝて、ひそうゝゝゝの弟代のゝふゝゝゝなる
ものゝゝけゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ハゝもゝ
そゝゝれのふをゝゝしもやまゝゝの文唐の文まれ
ゝ人ゝおもひそゝゝゝ紀て、矣ゝゝゝゝそも
ゝゝゝゝゝゝゝゝと上は代ゝい行のゝゝ
生後ゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
作ゝ作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人のゝもて作き

ることは、言ふこと多くぞ、しかしこれものきれる
人の作りてみとるよ。天地のんふうふはねど
を反射に作る世はなりうしもよりて老るこ
人の天地のまよしいとることを天ゲ下の
反まれ叶ひ作るもれそとるよがしともだど
古へは直てうること、ることも只ほうることは古よふ
ものんれごとし、古へ只初もかくこともがし
こかくんは直ふ時はむつしこと教へ用なること
なり。教へねども直れがこかくもし。それゴ中に
人のんはこまごなればうることと有をうるこ

わざも直きんようこれがかくもこれうくれねど
大なることはいこびなこと一日の孔子やむの
こまりて古へこともよこと人のをしへなこふはあ
らどかろくおしれこふて見ぬこど唐風はん
ろこと困なれば源く教てしるおもていこと様
して強き大なるこうこしてせをこぐせうは
ふはもとこと人のは直こふをおしの教をもよ
くこう作るふこうこと天地のこふくおこなこと
なこよこしこどして直こせこること唐国のは直こと
こて人のんこうくなこふこせこ唐国ふこうこほこの

をくをくをいつとい〻どさる義が鈍なる者てクハをゐれ
ゆくもの也なり。我ほのむ〻うしれさるあいきうしずと
天地より隔てとぐらぐいは日月也ぢい星也おくの
ほしとしては日月をもちまぢ今もろるぐと星の月日
をれろくをとおしてそれが天体日月星のたつよう
ゆくるぬくはをぐらは日月も星の星とも〻むうし
ようゆくておそらぐ。世の中辛らふ信きう。
さるとやつとの出てをぐらだのおとろくあふゆまん
やまて。ゆくろ〻ぢもおとろうはんをれしてて。
神代の巻と言ふ。そをおさむまれ古の考もて。

古への仏行を紀るぐ上までやう挙なるみども
をとくをとよう〻し。
○或人ぜ歩の古へふ仁義礼智をくをなられど。
さる和漢もなしとしてをくをいやしくをくをくせるくま
だ〻しのりの。ぢん庚申よは五のををを立てをれる
巻くををろ〻しとおくをむ元天ぐ下ふは五
つのものハおのぼうう有を。四時をなをぐ〻し
天ぐ下のいつをふうさるんなうう物やされども。
其四時をりくをす。巻も衛うして也宗を巻を
なう。夏も衛うしてあつを夏をなられるぐ〻く。

天地のりハ丸く御ふしてゐるを。唐人の言の
ごとくならバ。まちがいをふるちあるこゝろ。夏をハ
寒よあつくるべし。唐人の義ハ天地ふ背て。遠
ふ佐屋史ようて。人の歩ようハ方角有てさくや
をくゝとゝろやをふれどさいりハをざるものふり。
天地のなれ春夏秋冬の御なるふ背ける義也。
天地れ中の宝なる人いゝで天地の意ようせま
ゝてゝ義をけゝふことをえむや。元天が下のもれ
ふハかの世間のゝちゝ有ごゝ。いつくしゝもゝろ
も。狂うもさゝうもれのづゝ社有ゝ世間の有様

ハ絶じ。それをゝくしてゐるを仁義礼智
なゝど名付る世ゝ。ゝ世ゝ。せゝをやうるハ。
ゆゑ。なゝ。なゝさるゝもなくて。天地のん
のゝゝなるゝてよられ。さる友ハ世ハ久し
く治るをきゝゝやゝ。月のゝるゝおのゝゝゝれ
なるゝとをのゝれ。れりひせまるゝとゝ人のゝ
ハ言うゝたゝねゝど。れりひゝゝゝぬゝゝい
べのゝあよ行いきん。
○唐國の学びハ。ゝ始人のんりて。世まるゝ
のなゝべ。ゝくゝ。ゝゝバゝう有てん得安し。

系をぞ〳〵即國のだ〳〵の道は天地のまふく
丸く平らふして。人の心相よいひたくし
がくけまぞ。後の人。知えぞ〳〵。されば古
の道皆弘らるふやとゝいへべけれど。天地の組
ぬ作りは多ゆゑなし。其をゝうやまゝ。
唐の道ふようてがく成まるぞつをぞや。天
地のもさようれり〳〵ぞ。五百年ゑ年まゝて
世の數もゝ〳〵ぬゝなる。ゝせばく人のひ
し〳〵ゝ知あつぐてゝ数ゑ作しび。凡天地
のまゝ〳〵は月を初ておのづゝ有物を。

旨丸し。是をゝの上の家はゝ。その家く
まある業ゑ亟時は。きゝびひてゝなる形となれ
ど。又平らうなる上ゑ亟はもゝの丸さを
ぐぐ。されば世を治めるゝ亟は丸さを
〳〵〳〵てゝて治ゝべけれ。けゝゑ世ゝ
さは治〳〵ぬ法。唐の世をゝて知べし。かくて天
地の心なれば。さゝべさ時ゑ。ふくしなゝ
ぐ。いやく〳〵せばゝ。人の心をていそぐ〳〵
ゝてゝぐれとなる。唐人は上なる人は威を
きめし。其ときゝとゝのべど。おゝそけなゝを

きのとしよりしてゐるとしごろとなりけれど
ぞ感ときのものぬし道のかなしさを
うしなひてゐたりしかばこゝろぐるしく我
所国にはゆき道もてうろうとよみおろそげうろ
ときのようにて上のおろそげなるとして
かくばかりけるさおりひをおこしおのづきてし
まうさうひてとかなぬるれかければぬ
ゝかしぬゝかければ人易しゝ易ければ
年らうかくまうきとものころとなりぬ
宮殿衣板をうしなひて宮女衣とかざりおん人

あやをもきくひをとりて孫ゆ夫ときて人
ようあづもる人ゝ夫をきゝとも夏しあ
らじ夫ゆ井ふ天地ゆ人いとれ教をまきう
をうしておくてあうむうをかとなれいとせ
ばを令ゝを夫ゆ住せてりをんなどれりつも
のもるゝく有てばむ孫をなをうゝ
さのゝ勢及をあまくにだりひきひてあうも
人の行ゝみばうをなうむやいでや我
ゝをあればうかふうう乳をゝしゝばた
のをてさるべく孫らんとだりゝんい宜き老を

皆仕るべし。

○たゞこの国の、天地のなりけまゝ、古へよりなし来るごとく、板のやねゝの垣ゝのあさの衣、黒蔓巻の大刀とやうまして、そゞ〳〵れ御こぼうこう弓矢を携へて、猟しうるゝ狂なりゝ。なゞうかくうはうもこむ人のふいうりくし給はきこゝろぶるをぬむものゝ、唐人のさゝゝと義せし頃ようゝ角で宮殿衣服をのみまうしくゝ、上の分いとまえるゝくふいおろこふゝ女けでくゝなゝひかしこゝふあゝりて、上の位をこのごゝまつ

てゞ居ゝこゝたゝゝまゝゝ上ハ御分のこゝまえくて。御ふいとゝ下まこゝ。居で古へ上の上のごゝくゝ物て。唐のごゝくゝをふうこゝ上を釋をこゝいせゝゝ。上ハあれゝも、こゝゝゝ如くゝゝゝ居ハまえゝて。ゝゝ居ふゝゝとゝゝるゝゝ古へ居ゝ様の居ゝゝなこゝゝゝれゝて、ゝゝ名の作るのこゝなゝ、こゝこゝの居を忘て、人の国りゝならひこゝるあゝまちゝゝ。なれゝるこゝゝゝ。或人問ゝこゝゝば古へハ皆ゝゝこゝ人いゝこゝゝゝゝ。答ゝ問ハゝまゝゝく直こゝゝゝ忘をこゝゝゝゝゝ居ゝゝ。凡人の直ゝけまゝゝ。

ものゝ物がたり。のれがれ。ふるさまなる
ことなり。さて直こゝろはさてたゞまゝくらうき
こゝとがし。世を棄んとれのゝ人ゝまゝあれど。
直こゝろのよう思ふこゝとなれだかくをなり。おくれ
なきれば。忽ち云ひしるゝようして大なる気き
し。直こゝろ付ハいこゝろおのゝこゝろこゝるゝと夢あれど。
隣こゝの村里のこゝろのゝけこゝちうこゝをあらこゝそこゝ
ぐくまこゝて。ひいきづめ中こゝこゝ也。
○世の中れまるもれを人のこゝ夫しこゝとれこゝを人ハ
おろこゝ物こゝや。天地の又母の図ようふ人も數も

鳥も虫もはぐこゝまこゝ。まこゝ中ゝ人ばうこゝ
こゝこゝこゝハなし。こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
天こゝ下ふ一人二人こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
人ばこゝこゝけこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
ふつこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
まもおのづこゝ死こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
せ。爲ぐまのあこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
大なこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
星の大れまこゝ時ハ星こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

くひもの、女の道につきては筆へども、ただ一つあり
の出して涼くかまふることなきがごとし。唐
にては筆を人に志らせず、上なるものへのみ伝へて
おこなはしめことにて、筆のわざを受らく、
これぞ尭舜を儒家の上におき、釈迦のごと
く立て、其次の夏殷周を説授しきたる也。尭
舜も夏殷周もいひ伝ふることはあれども、いと
ふるきことなれば多くうたがはしきを、さては益なきことと
して、かくして本をきゝらくして、人をまど
はしむる也。是を伝へてはかりものちしれ。

さることをいひおもへば、今おのれにおきては一天が
下の人よくしれるが、上つ代のことを何もしらな
かりしも伝らずいひ聞て、天が下きものなきことを
志らせて、後に残りはあれど、こゝろくにの学しあり
されどもみるべし かくさぐしとよ紀ほどふ教をたて
でさきの世の事をも学びたる人は、人を教へ思ふを
経済とやらむといふよ、うれがたしとす孔子の
をしへとかや聞るを、ひとりがしるも、なきことをとくふ
うちてまではいふて何の益もあらむ人は教にして
がふ拙とおもへるは、天地のしんを悟らぬゆゑなりけるを

しく、ひと。だも多し。そんハうつくしき。必四時の
移りかはりがめし。日姓をめらぶことつよし
こゝろ思ひてば。玉ハ兄弟おなじく。獣と同じと
ところ。天のんよいつつ多獣よりこゝろ。いつるや。
生ることものハ皆同じこゝろ。皆く制をうゑ
人なれば。其制もあるべきようにて。ものごと
こゝ草木ら獣もこゝろ。おもこが其生の
写る隠て。生まる制ハ天地の父母の義也。此国
のいとしくのこゝろ。ゑ者をこゝ。兄母をがゑ
ゑこゝをどよりて。ものい人情の生れ。こゝ

通ぜしてこゝ。兄母兄弟の通ぜしい
ふ多し。ゑまくはらう。ゑの通ぜしをあり紀
はこゝせし也。物のかをつくだ兄弟姉妹お通
て。人い生まれこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
おのぼうこゝ。ぼらうゑの制ハ有しぞうしぞ獣と
うこゝ。むこゝて。日姓をめこらぶて人国のものい
毋と対したるこゝ。ゑまくゑ出
生ることれりこゝ。隠しこゝ。ものこゝ。
也。ふと一変制をこゝ。必天ゲ下の人後の世と
こゝるものこゝれりこゝ。ものこゝ。其日姓

まつらぬ教も守るなどなけれバ、天を弑せんかハ
君を弑し父をころすを制ハ破て背姓めとらぬを
てん然とおもへるハ、ぬけなる愚昧にや。元天が下
ハちひさきるハ、とてもかくても學くらべられ
傳りるあつてよろさま、上傳れハ下も傳れり。
から人の云ぬくちうも動ぬ世の百年あろむ
よりハむかし也。言たれとも千年治きるうるそ
よきされ。此天地の久しきをむかへていふ千年も
萬年も一瞬なしあらバ、よきくぞふよきとも
あしきも丸くてよきまれ。才なるるとこり

ハ益なし。
◯佛の道ハ人をして悟りてよろづ人をまよハせし
とまれ。まつしきハいつまでたりて見ん。爰識の佛ハれ
さそあだつるぞ。それをとりてものゝおのが欲
まひらるて佛をとりて説りもなき所をしのどと
もと云ぞかし。それもしハ人まのミ悪あることに
いつがいまうし生るものハおなじ物なるよいろふは
佛ハ禽獣まで教うるやうさせてむくひなどいふこと
を多くの人さるよくおもひりハ、生るゝ古世よりこれ
往どもいひてもとづらはしく人の耳にも入て疑ぬ

べし。又今の御世までもくむまで罪報は人
を殺せしよりも大なりとはなるべし。然るに今よ
り先つ世大きなる乱て年月ある軍して人殺せる。
その時一人も殺さで有しは今のなかの人どもなり。
人をおほく殺せしは今の旗本侍なり。今かし
こく殺せしは大名となりぬ。又それより上に多く殺せし
は、主のぬしとなりぬ。さてそれを限なく殺せしは
いかりてやむごとなき御方となしせたゆひて世く
栄え給へり。見よ何のむくひの有や。人を殺も虫
を殺も同じことなるを知べし。すべてむくひといひ

あやしきことつくりては狐狸のなすことゝせり。凡天
が下のものは、おのがじゝ好ることあれど、皆ことえ
たる事なきといふ。狐狸のことは人をしもたぶらかすを
己がならひとするなり。それも今往昔（イニシヘ）は人多く殺し
たればうまごぶ報やせんとおもふ人あれば、狐狸や
がて知て、むくひのことをおしへて、なぐさむること
をくしらしむ。人多く殺せしは、ほかれぞうしもし
此後もさる世はあらば、まなかるまじころして、家を
ましなるを挙むとおもふまゝ狐狸もえよりがたし。
みるふかく治りてはさることもなければ、たゞちく敗を

殺さらぬまでも苦しめ責めて、信をも
狂はしもぱらうべき。
○さきの猛を当らして、世の法をつくるべきよ
つきて、或人云、今の世の法まことにおいぬべ
き事あれども、師匠なるむ、又法はいかにて
道をえんと思ふらく、一方を
防ぎいとふるはれものをも、系むうひて殺し
てむとすれば世の法のみをもしとおのれも
きうらぎ、こい人のこころをきつぬものなり。こ
うられこころをうつんよ。六年より生れてさせること

もなきよ、たゞ年よりうつさるゝ時よりはかくての
ちやい有べき。古へ云おやしくの事をたゞひ
時しあらぬ。まれ思よなりふむを、今いうよせ
んとおもひて、かぬべきわざをして命を絶
るのみなり。人の内より思ふことあれど、時のいき
ふひよりきぐひてゝるけさをまま
ねび人はきつのみまして世の孔をうしと云て、
孔をすのるあらば、一人二人をんのまこふせ
んも。世の中ふ怪いでは今日もへがさけまだ、
ぢむうるなしてをかくしてやうぬ人

のんへばなるものうて上は猛き威あれば皆人
なるべきことなり。されば猛き威
とゝもびる孫は他くて、家の用をむとする
しかるべきことなり。されば人はいかにもろしといえど
さることとて学ぶ人いとなきはあるべきゆは
一人こゝにもあれど武をまもびでこゝろくこと
ろさものいくそばくぞやさるべくをもてが
こゝろとなすうれいでもしるあるむけは
そんこゝろやはらもうさるのもしきものを
世いつまでもおくてあるむものおりやや。

未知ぐこゝとものなり。けのんるようなる人をの
みようとおりふはは其主の為ならなれも。多き
涙者の中よはさるべくあるてようも物の
宝多けきをもくてこゝかしこふ居れ
とる猛者をもおらせど。又孤きていきはひ
をもおそまるもうかなきもぐなく
ての人おりてをもなぐこゝうるとれぐんもし
うなることおりふやんの偽はは人毎よるもれ
なるがしく人の上なる人ばこゝものはるも
あるとれのこゝ。皆くやむこゝちぐしてき

そぐつなり。ゐるくを涙の約有るも大うさよ
りぐうてい。松よ辱しとおもはじ。其恵しの
人よりきてをだこちまて。ちうをそべ。涼く
思つものも。れまで。交ままとてつまでも。
ちまきすぐきて。ちうかおろうをうをよく
仏ぐし。よかしもまき人の涙者百も餘
きらんい。皆室のを。ぬぐ。ゐで。うる
つどうよいうくかまくうるいそなくなど
せるを。ま〇ぶてなれど。そうるくも。猶も猛
き室人のなくてうる有でうるど。其人のあうても。

ふよりはそでふうるいど。すいまるを出さ
んよ人の陪いどうるいでうるとれのふおのづら
つくだしさらぞ陪ふをせんとをるよだれ
うへ伝よ陪いん。親あう。言るあうかくて乱な
んようふなどゑひて。逆うくを。せんうるなく陪ふ
ものなどうへふをまとうむやようて。鋒うよ。
ゑづうらまを示さぐ上下とあやちらぞ。祝し
みゑるのぬく思ちんまんをてふ名のをぐ上よ。
ぬぐけなをさん。骨よきむべしるゆまへけ
ゑのなちう命ををうまどおやるをもうく

こゝぬそどなるめ。凡人い物のかへなくて。事の
情も深くおもらぬものゝ也。よりて佛の道い見と
こゝをこれば。今生後生とゝろ。富貴とおと
いひて。引入れる。よりて人皆なぼりぬ。武の道
もゝ。ふゝふゝもろ。ゝがいあしゝと。おもてれこい。
かなきまゝふ。ゝとこいれりて。人の心の引
こゝるつゝて。我のこゝふるなしゝ。さて浪者。法の辱
けなしゝとゝて。おももゝ。百人五百人よを。後ど
もゝ。ゝいひおのゝて。天が下ふ。皆んゝあゝゝ。
馬を出さんよまゝ。ゝどゝて。人集りぬゝゝこれ

ともて。大ようはゝさゝ及なりけゝ。よりて。ゝるけき
をゝるよゝ及いなゝ。かゝいゝゝ。ゝ軍のゝのゝ
とのゝゝおもいめ。ゝゝう浪者をゝゝまゝ。ん
剃ひゝゝして。家も富ゝ栄えゝ。体よ武の道い。
出けゝば。おろそゝなゝ。私なゝ。ゝとゝもゝ
ゝて。家をも治べゝ。天が下をも治ゝ。
○或人云。古今集なゝゝあゝゝる。ゝのいさゝ
ハゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ
天地を動し。鬼神をあゝゝと。ゝゝゝ。男女の
中をやゝらげゝゝけゝ。武士のゝゝゝゝ。ゝゝゝ

るとうつくしいこゝろあるべきことをおもひくしよることをて。
いつるなれど。見もとるるこゝろもそなはらでうくしてそぐ
てをいとでやハしきんよるる。凡人のこゝろハ。私あふ
物をて。人と爭ひ。物をうをりて。事をかつをこゝろ。はう
のこゝをハ。物のの上をて。私ことを用る方よ。世
治りて人靜也。見もたとくハ。此時のめし。爰いあつ
う教でき物のをて。爰をうよう。爰爰あつくのあ
らぞ人をこゝろぞ。物をを物をして。あつ物
さむさぞ中をも。教を教屋をつけて。志のぐをの。
有をてうをつき。堪見世の中ふるゝわづらぶ

なくゝ。雖うはをまちんハ。事ハとろうの多うもふ
あり。をを。をを接ハいと事をなををよをみ人ハ多驚
うせだやはるるくいひてハ人のいうぞそしらん。う
くてハ人のようをばしだなどこひておをれハ。孫の
ゝをあをゝ。まをの多をあをゝぞ。をれどもむうし
ようハゝをを見ひ未をハ今よむ多ハをうれど。
むうしの和らをなるゝハ。をゝハ。をををちぬ。人をしく
だハゝをを和ゝ。ををおのづをを物の上をふを
をを。物の上をていををゝ。つをを位をくいををひ
あらん人ハ。多の人を皆なをみして。多をおをゝ

し。友伝いする物うし。然しきこゝろのみいきづ
うしとて。われらぞのこゝろとまで〳〵うけくぞし
さ人もよわさ人をぞ皆おしふせんやうれた
と和らぎをかゝぐし其今後出るよいもと
和らづんとてのんるれあるねど。ん多れりこゝの
ふはひ出る物なれだ。おのづから多ぬようい。
和らうるやさしきるあり。或人云。さらふい。
理なれど。狂いて上つ代のこゝろして今の世る。
ぞうう大多かうて。人のんが多ぬをべいこで
昔よかつをこゝを切むや。われらぞ其時のまるく。

よろこぶこゝろなるべし。古の事今の世なる
事なること。答。強多きこゝろこゝは後もれり人。元寇の
理をいつも治ぶをいふも。どんこゝ和をこゝの人
るこゝをいつも。和るよこゝ天のんようていく第
もこゝのるを。多くの人のうちさるよれ天のうま
きこゝんいうこゝ。こゝうぬ天のんのまこゝまこゝ
ぐひまつこゝのよこゝのあらむやハ多まく
ま紀君の出むをまうて。第ついらこのみ。こゝめくも
し上る。古くをぬこて世のなぞうらんをおぼを
人出来む時ハ。十年二十こゝせをこゝぞして世い

皆まことぶし。大ようとてゝえなはらじとおも
かいまぶし。上の一人のみこと世いうつる物よぞ。
あら。命うけうる宝ぶいくさのきみのんぞよ
まこと。多の人の分をとしまぬさまよりぬぞとし。
ちぶ行事もふるはんのなはれるもうるよ。

○讀加茂真淵國意考

真淵之言蓋謂我國上古俗淳人樸自然而治上恬下凞逮至儒教東漸而鑿混沌牖聰明離淳去樸古風漸漸美其冠服壯其宮室君尊於上臣擅於下智術益盛俗日趨醨卒至亂逆相繼王室遂衰矣是儒學之害甚於釈氏也又謂上古言語簡約情性純一發諸吟詠直而不俚後世傳習文字乃有假名筆翰盛行人習異言世移俗換言語大變上世之言毋繇可繹獨有歌詠存焉古言賴焉以傳於今耳真淵素學古歌而通古言研精潭思至老弗衰其治古

言也能發明千載不傳之義詳釈選述以訓學者其有功乎　國籍蓋不淺歟矣嘗與友人讃美論之頃又讀其所著服其用心之勤而奇其所見大異乎世人矣蓋真淵亦興起於我藝園復古之教者歟其從事　國籍博讀古書尋究古言推以觀古所以其見之超出於世也惜乎其不能潛心於聖人之道而獨見我　國上古淳素因循之治與彼老聃無為自然之道相似也以為異域同揆治國之道莫善焉　皇祚之長久勝乎万國者以此道已於是貶譏儒道為小為偽歷詆羣聖無所忌憚也真淵動曰直々所謂直者直情徑行之直乃戎狄之道也其不知聖人之道於是亦可以見焉又有同母為兄弟異母則姊妹姦通毋禁之說此則禽獸知母而不知父之類也非人道矣以此為　國美事甚矣其惑也不直同人道於禽獸也乃至謂唯人有智故悪禽獸无智勝於人為甚矣乎其言之也又謂四方諸國有字不過数十足以成用矣唯彼華字至以萬計多文難記煩雜無用因極口貶譏聖人之國而論其虛文惑人邪智用盛夫四方諸國無有文字若夫梵字満文之比者直以音為用而已非有義訓矣唯聖人之國作為文字

記載名教皆有義訓矣君子之言用此成文所以行遠也此華夏之所以為華夏也礼樂之於治國也文字之於傳道也非聖人之國孰能與為此非真淵之所能知也宜乎其言之乖戾一至於斯矣凡天地之間華文之所通行不過十数國其餘横行書不同文如我國與華隣風土相如人物相如故假彼字達我志乃其宜也安万侶之記古事也舍人王之紀歴朝也莫不然矣即使真淵而不讀華書不假華語則必不能有著作矣今讀真淵之書雖假名以行亦皆本由華語以達其志者也不然則又安得立言行世焉乎今反譏華文以為無用譬諸奪人劔賊其人毀其劔謂無用豈不大罪矣乎嗚呼無為自然之道老聃之言莫以尚為荘列之書詳之又詳其言盡矣其道可以救衰世矣亦聖人之所不棄也真淵之論乃得其一端者也今以此論我上古之治則似矣夫真淵頗讀聖人之書而能興起於復古之教用諸國籍焉能發明古之言不亦豪傑之士哉抑生其國必為斯國揚美隱悪礼也君子之心孰不然矣然欲揚其美顧顯其悪陷於禽獸而自謂得之不智莫甚焉且襲人故智立己意見貶譏聖人輕侮華夏倍其所

由毀其所學要之雖讀聖人之書不知聖人之道也
是以致此乖戾陷罪焉已惜夫其餘僻見強辯不足
論矣若其破釈氏報應之説及駁我國近世所稱
神道者之類則確論也君子或取之
天明改元夏五月淡海野公臺撰

辨讀國意考

ある人の讀國意考といふものをみるに。その人。徂徠氏の學風を慕むとなんいへて。よろづを。己がぬむ不ふびをはけまして。加茂うしの。ぜよぬけいでられたる。ざえの狂をうえて。真淵が興起於我國園復古之教者歟といつて。其本い真ふ まこと。其ふの事も本まこと。ふ望教學のこゝろ。ふをこゝろざしぬ人の云よしあれど。海ぞるふたゝねど。なほ。ひよ。は海ふ蓋へたるものあり。侮海量が作なり。其蓋へそふおもぶこゝろづゝふ云のゝ長くして。らぶくしく。

もの〇といふべきなるべしもとこれをうけて是をうけ
海墨いえより親魯ゴ教を奉どふ社のものゝ
あれば いうでゑゴ神道なる國の大道をきゝん
やおしへこそ古御ゝうをきゝをまなぶまうてあ
きだ さるべきなるべし 侍るおもてに人を偏破して
徹ごろも心ろうとものなるゴ有るよ 手いさゝか毎と
はひやさんとれりそもゝ我ゴ加茂大人ハ実
ハ千年の一人うてで来ま旅て千古の学を復
古せられたるハ実大きうて後ゝ云を加へんなれ
ども今ようして云る時ハまゴ行事もうるはう

うして 少きゝゴこゴ云る事いとおほし 聯ゴ系
神皇祖(カムスメロキ)の大道を論ゴるよりてへいかゴ深きを
清(キヨ)くゝ知まゴ 其真をほゝまゴる事をくはうら
ゴ 考ゆゝ天地のゝといひ人と生とゝ人数ゝる我
ゴ道のそこ(コヽロ)あゝゴ きてゝれゴ まらの事ハ我ゴ
所本居の翁屋大人 法ゆゝらゝる教書ゝ雑明して
実ゝくゝさゝれゝまゴバ いかゝゝ我ゴ無をゆゝ我
たゴ古学の行ゴゝを せられなる所の大切をわりゝ
ごゝなゝゝをゴて加茂大人のゝなゝゴ のゝはじめ
をひゝくゝ人ハ侍ゝゝ ゆゝゝあゝなるものゝ これだ

世俗者の雖破したる云ふ。あられる事もなきにはしもあらねど。大切なる。小瑕を以て。震ひ動くべき事。古今の先例なく。世故なく加茂大人の為に傷害をなる事たのもし。

蓋真淵亦興起云

世云。世俗者よりきたれる。儒者の者云ふして。是又何ともいふべき事い。皆聖人より起きたりと。又事也。そもそも。永古学の第一なるもの也。万葉集也。万葉の古云を。能学ては。古事記。其外の神典國史よりも。万葉をよく。ふかくひとつ。聖人流の邪智をとり。祓れて。神随なる志意を求ふる。数千年。人心を。染よむ。ふの渓意をとるべきなり。永ぶ神國の道の。妙理ふらるべし。其万葉集の古云を。後世の注書ふ。ましべ。古を以て。ふる事をとりて記する人い。僧契沖也。契沖い。茂仁などよりも。やはらかし。是志例大人のおづく所ふれば。いうで。後園よりも。起きりといふん。まして永道いその後園よりも。ふの後意を。後くふ。ふん事を求むる事。佛家の煩悩をとく。善提を求るごとし。志ふるをなんで。後園の力よ

ら人や。乞彼学流よ。性理学よ。天無心也。鬼神氣
也。祭則致我誠のゝゝなどゝつゝを破るる事。あとが
古学よ。後世の邪学を破るとおゝるゝといゝぐゝ。
其後国学よ。ゝあゝとゝる天。霊あゝとゝる神。もと
聖人の寓言ゝて。永遠よ神といふものゝ大なるゝ。
聖人の邪といひ。天といふものゝ。道なゝば。為を弑して
玉と奪ふ時なるとふ。天命ぞるといひて。民を欺うん
為ふ。ゝうかまへたるものなれば。爽い性理家よ。天と
無心とし。鬼邪を氣とゝるも虚なゝば。まゝうゝと義
卿よ。本邪の神とゆゝをゝゝそれと同じやうに

れもひて。而事本紀の序ふ。竊観諸其為邦也。天
祖。祖天。政祭。祭政。神物之典官物也無別。神乎人乎。
民至於今疑之。而民至於今信之。是以王百世而未
易所謂藏身之固者非邪。後世有聖人興于中國則
必取諸斯已。といへふゝゝゝゝ。本邪の邪をし。
古の天皇のゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
ゝゝ事ゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
う。既よ性理よ。邪を無ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
ら。ゝゝゝゝゝ。邪を作ゝものとせゝ。藏身之
固者といひ。聖人必取諸斯といゝゝゝゝゝゝ。

よくしるべきなり。そもそも本邦に外とかしれ
ものは。祀先王配天などしかの作りたてて。いはゆる
寶祚無窮なりしを。聖人どもの人智を以て
是に效ひて百王一世の基をもひしうるべき事と
れのふは。意味のいとく捧腹すべきぞ　此序 徂徠集八に見えたり
見えて考合すべし。るもし儒者とやらの事をこそなされてか
くいふてもたゞし太かる事に打しあてふりかてつ。ぞ
まうしあれ。まことしくお似たるをもていはゞ。佛者
の宗門をたつるなどにはなほ似たる事ありとぞ。徂
徠も。まさになすりといふもんを。儒者はいふべきにはあらん。

なほさばかりに疑はしくば。彼門によりてまさぐ
その大に異なりしんを知るべきものぞ。
獨見我國云く　與彼老聃無為自然之道相似也
けるはもよく人のいへるも。されどもちやく彼の儒者
に志めされたる書どもしありて異域に及べるもの
なし。儒者などもそれ書をこそ見べ。私のづから疑
はしけんものぞ。なほよくよく弁せん。
真淵動曰直く　云く　戎狄之道也
また道にまことまごころなどいへば。戎狄にいふ直とは。
いたく異なり。本邦は何事も皇神の定めまにまに

按ずるに。其所(ソコ)按ずるに。まことがひまなくて。私智をふるひ
弱ふぞ。天下を治め給ふ。是をおゝ遠天皇(スメラキ)の道
なり。是を隨神道(カムナガラノミチ)といふなり。又天下の士庶人
い。その天皇の所をふなだゝしび崇うじまつるべい
まつる。是万葉集に。天地(アメツチ)の初(ハジメ)の時後(ノチ)ものふ
の。八十伴男(ヤソトモノヲ)い。大君(オホキミ)に天地の初の時後ものふ
とまつるべく。是を正(マサ)なる正(マサ)なるを。まつるを
聖人流いとして。上のまをぶまじく議論に
及び。つひに天をまつりして。その位を奪ふに
る。さやうのさうらるを知らるる所(ミクニブリ)を風俗

ゐる。是を万葉集に。神倭(カムナガラ)コトアゲ挙せぬ国とよ
む。まつるを。聖人とも勝(イヤ)れども。我狄の道とは
といふい。乱しとも妄言とも言へども。其所の
国の。己が制度のゆきとゞくるゐの道をさし
て。我狄道といふも。本(モト)聖人どもの邪智私言を
まぶ。たとひまよはしきれば。恥づき事なり。
かやうの名目い。おのゝ。己が道の私云ひて。仏
家より儒道とも。切支丹とも。外道とも。その
言とも。外典といふ。こゞ。おほう。天皇祖父を
より見時(ミルトキ)に。教迹も。孔子も法のごとく。まつるに。

戒狀の道しといひて、おどさんしとそゝぐ、ぜをして、大人(タイジン)をおろれきめむしとそゝふびわし
しく、不智なるうばれたぐしきハなし。
又有同母為兄弟云々、甚矣手其言之也
同母を兄弟とし、実母をまゝ姉まゝ妹として、是
母をぞ、嫁をぞかしこび、是古の道なり、まつうふ
をそぐうやうなりしい、聖人の嚴密をぞ、
る道浅く未て、それよるしくるてぞそのの後の
年なく、源氏物語のけまでも、妹背をふこと
いさしうなぞかしこび、は余風ぞ、今も有て

従父昆弟ごとに、まつるとば、学ぶ一日全孫といひて孫
ふまうこぶよあるぞや、れてかやうのし、聖人の国ハ極悪
のまたるぶなよ、教を嚴密よ之なるなり、まつうぶれ
バ、実母をとし、炭(オカ)を風俗なるなり、法候ふ
とし、己が実妹(マコトノイモト)の人の妻としてあるよ、衰道した
るものぞ、ぞもよ、ぞ、本邦ハさやうの極悪
をとる人とくなく正直(ニナホ)なる風なよ、神皇(カムロギ)是
とまつてぞ、ぞ、おほらふ、教をとるひし、
数千年のなる、是をとる人まをとをいく、御国(ミクニ)の
正一ぞ年を知るぐし、ぞぐは傷ハいしやの

ゆゝしきことなりて。季しこれ師の古事記侍。まさに
蔓延せんず。淫奔せられなれば。こふ奔ぜん。聖人
の道をのゝ道とれりこふ人ゝをとるほうして。上
古をとゝば。おのづゝ不審いとゝくべき事なり。
さて禽獸知母而不知父などかしこげふいでゝ。
いこうで。禽獸母をも主ゝんや。その生出て。食を求
ゝるのあゝはざる程ゝそ母の乳をまゝく呪ゝ
成もしていは母をも犯して。子を養しもらなばや。
いこうふ。ゑ忠を思しくいまほしくて。さやうの禽
獸ゝ似ゝる人あゝや。皇神の罰を恐をぞうゆれ

ゝいゝえゝそいはざらの。そもしく本朝の古ハ。
唐のごゝく。妻親を軽しめ。あ軽づる事なく。父
ゝなゝべゝる人中ゝも。おようゝ母の子ようゝそ産
出られば。まゝだけのちゝおのづゝゝゝゝて。
大御祖とゆゝて。こふゝるゆゝその外のゝをとつゝい。
理窟ゝて。古をふいあゝべ。さゝゝゝそ父を母ゝう
御しゝゝゝすいあゝべどくしく思べゝさ事なゝう。
唐ふハ天ゝ父母をいつゝる。親敬お兼なゝるゝの
ハ父ゝとゝて。天ゝうも父を主人ゝ。母をば中ふ
かゝゝしぶ。皇ゝそ已勝ゝの戒狀の道なれ。又君父

師とのいひて、ものゝ師を孫かゝ事く、仏喪など
さくいふゝるハ、儒者どもゝ、己人ゝ孝まれんとて
の私ゝく、師の事ども勿論なれど、実ゝなくく
たるいあまりなくば、次る「以此為國美事」とゝ
いふ、ゝゝゝ美事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ど意のゝ、厳密ゝをゝて治ゝざるゝハ、大やうゝ
してよく治まる皇祖の道ゝものゝや、「至謂唯人
有智故悪禽獣无智勝於人焉」といつゝと破せ
なるハ、倫者の言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふまゝゝふあゝば、聖人の邦智ゝて、物と実ゝと破せん

として、ゝゝて神道のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
されゝゝ、夫人ハ産霊の神の所魂ふゝて生し
ものなれば、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれど出なゝゝどいゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝて、倫者の為ゝ、老聃ふ日ゝなどあざ
けゝゝふなゝ、人の智のをゝれるハ、産霊の神の
所霊ふゝれる事ゝて、皇邦のゝ、聖人国のゝゝく、
厳密ゝをゝくゝれども、おのゝゝ人ハ人の道あるゝ、
ひゝくふ邦の所霊ふゝる所ゝ、夫をゝゝて、ひゝすら
ゝゝゝとハいゝゝ、おやゝの所、ゝ国ゝゝのまゝゝ

なりなるふし。はかぶ武備を備じ。釈氏の報恩の
説を破せられるるどふも。云過（コトアヤマチ）ハ多きぞうしされ
ど通るあづうしぬるすいこれすぐしぬ。釈氏報恩の説
を破られるを。君子或取之とつるハ儒者のひさす
ら。釈氏を悪むるしひあり。実ハ易の剥の破し
ざるぞうしもおぼえど。まるはけても。もち月の
こちこちいして。続ふれあるこふのあるくまふく。
古の道をきあるされ。釈本居大人ハ学ぶ。
かしこうけり。

唯聖人之國作為文字云々 此非真淵之所能知也

此論ハ儒者流の学問にして。いるてもこの古学
ふせるるハ。此事とつるぞうし。まづ今の文
字てふものハ。この聖人の作りものるあらず。
聖人の世の文字ハ。もやく絵ものるる。
らぞして。ちるこの絵ハ。李斯とつひし男ハ篆
とつふを作る。まもるぞうしして。隷書ものる。
是秦始皇帝ぞ時なりこ。李斯とつふも始皇ぞ臣
なり。まるれども。文も繁なりして。渓の説
ままる隷書と変じて。楷書と化ものる。是今の文
字なり。かくいとぞ秦渓より作りても。本い聖人の

世の文字ふようなることべけれど、その聖人の
世のみ字、こゝやく絶てきる人おければ、いうたゝも
きゝごゝろ、されば金くゝ今のみ字い、李斯ぶ作為
ふもしぶくるゆゝうも、尤て儒者てふものゝ
道理ふらゝく、己ぶ為ひようしきゆゝ六經を焼
うれ、儒をあふようせゝ、恨をさくゝとゝれて、
秦王ぶ学ぶ作ゝし文字や、儒者の冠ふ小便せ、
漢王の代の末ふ作為せし文字とも、己ぶ聖人の
仲ゆふゝゝゝて、記載名教云く所以行遠也ふ
ゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝ

聖人の作為せし科斗の文字ゝゝゝ、其世迄
き秦漢の時ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝて、あゝゝゝもなく、絶てゝる物とや、
は一つをもても、聖人の礼楽制度の、毎用の
書物なる事をさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝてゝゝ用ひて、本邦神世の道をわゝゝゝ
文をゝひ、武をいやしめ、君上ふ弱く、士庶下
ふ強くなゝて、法ひふ武臣ふ世をゝゝ迄なま
て、ゝゝごゝいたゞ聖人の道なゝ、ゝゝれゝ紀廷ふ於てゝ、
日神の勅命、實祚無窮の偽言、万代ふたゞうふ

事なく、拾天子ゐもうして、さしまようごの
世治いと、是神國の神國たる所以(ユエン)なるゆえぞ
已がみの世までだるよ、安穏まて、ゐとたもてる例
をくおさ、聖人どもの、こうけもあぶふなるんや、
かやうの一大事の美事あるべうて、華夷の華
夷なる能はいくべうふ、文字ごとの事として、
ふがともがらはほこらんとをるは、万金の家よ
へて、一方金を以てほこらんとをるふひとしと、
庚申の文字は、義訓あるべうあるよ、遠きを行ふを
いとゞも、ひつ程、義をふくもても、通ぜぬゐは通せ

ぜ、そのくく文字をもつてもよまるもの、注をもよまる
るものなくべうて、聖人の仮名のゆかなくもも
いちめ、学文をして、数年骨をおりでいとまれ
ぬをや、さまゞ余国は、さやうの無用の事ふ、
力を費さゞして、国用をもるべうあるよ、漢文字は通
ぜるゐ、もべうの数国をもゞざるをや、又名教礼
楽などいへものは、名のくくしくしてざるにゐ
を治る用ふくぬものなり、さればうて、つひよゐ
をも、戒教をもうまて、聖人流の礼楽はあるもな
く治をて生れ、

安万侶之記古事云云豈不大罪矣乎

これらの事を。思さだめしくつがへすことを
なれ。いみしくも。老ぬるかくふ相伴てまゐれど。
まつりごとを。三韓蕃臣となりて。王仁を貢ぜしより。
あらふまうをして用ひらるゝ。しるしにまゐるべ。ふ
くてうふいとぐ。いうれる文字をも。法をも伝ら
まし。新戯本を作るようも。安きるなるべし。
又漢文字あるべうれいとぐ。さしもいみじうし
古の大御代の。栄のまさめなりしをうなれば。
孔丘をもめしてゆくゐ法ふべし。今学に

ても。唐人の千人二千人に。小国の大名の物もて
も。そくして来るべし。まして今学に天竺の梵
字。阿蘇陀の横文字も。来るおぼえそれば。
いづれをも。たゝふ法ごいて用ひべし。三国
蒙も。ちうう。今学ふおしなべて。漢文をおく
学なるゆゑに。伝よまうせてもくふくふこそあれ。漢
文字なしでもの。いうをどもらふこそなしし。し
漢文字なしでも人えうまゑといとぐ。なをも漢文
字をも。司馬遷ぐ伝文にて。王義之ぐ書
をも。天竺阿蘇陀よもてゆくべ。法ゐうもむ人あら

ん。それもなく。漢文字なきをおどれもてるを
かりしゝ也なるべ。著述して行事をいとんや。
まゝ和をゝづのたゝいい。傷者どもの上ふゝ乾。
さゝゝ孫を食むふ。仮利ゝきを文字を作りて
墨し奉王や。李斯やを。その文字をして。文
章を作りてゝゝるゝ。傷者ゝ以合ざる。不義理
なゝをや。

夫真淵頗讀聖人之書云々不亦豪傑之
士哉

然文惜乎甚不能潛心於聖人之道ゝゝひ

なゝゝ。今ゝくいるゝ。よくゝ真淵翁を。己が
門ゝゝ出しゝ人ゝ也。ゝゝゝゝ。ゝゝれども。
漢籍のちゝゝふて。皇邦の古書ハ解しがゝき事。
然文よいてるゝゝなれば。いゝともせんゝこなし。
抑生其國必為斯國揚美云云

かやゝゝいゝれど。ゝふ儀国流の学者ハ。おれゝち。
本國を忘しゝかろんを。義卿ハゝゝづゝゝ。夫と
称し。純ハ天皇の所系なる神代紀を。俗説
のゝゝなど。あゝめかろんず。夫ゝゝまゝゝゝあゝい
せる書の中ハ。忌憚なきのゝれゝゝゝ。拳て

かぐ〳〵、庵ふつ〳〵居るのみいさるものふや。
既よりは倫君おぐも。常ちよ、西蕃と華夷と称す。
是皇國を夷ときるなり。まもつも我皇邦の制度
をもつて。國史の筆法をもつざるなり。これらもて
と。非時文摘紕よ要しく倫要しそれば。こと
ふいなど。和は倫も。本書ホも。いそなほしさと
なりあるとつぐも。事ちげきをく重ぶ。見ててをを
とも作りて文化三年九月芝日拭筆下ふられをこく。
[illegible]

非時文摘紕

嗣出　琴屋社中藏板

橘本稲彦著
第業拐　五十音引小本近刻　全二冊
紫文消息　小本出来　全一冊
紫文製稿　小本出来　全八冊
古言類解　五十音引　全部六冊

文化三年丙寅冬霜月

浪華書肆

心齊橋通南本町
河内屋儀助